

静岡県における効果的な小児事故対策の検討

(分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

* **

鶴田 憲一、望月みつ子

要約：静岡県においては、平成5年9月よりモデル地区を選定し、子どもの事故防止のための啓発・教育活動を各乳幼児健診等の場で行っている。これらの指導方法に対する保護者の反応や効果を把握するため、昨年度はモニター地区において、また今年度は、モニター地区外においてアンケート調査を行った。今回の調査結果によると74.5%の保護者は子どもの死亡原因として事故死が多いことを知っており、また95.8%の者が日ごろから事故防止に注意していた。特に注意している事故防止対策としては交通事故、やけど、転落・転倒、誤飲、溺水、窒息であった。なお、事故防止ポスター、パンフレット等を目にしたことがある者は41.1%で、保健所、保健センターで行われている各種健診時の発達段階別事故防止のための指導を必要とする者は87.0%であった。

見出し語：事故防止、子ども、健診、安全チェックリスト、保護者の反応、効果、啓発・指導

はじめに

本県の乳幼児期の死亡原因の第一位は全国と同様に不慮の事故(表1)となっているが、従来、行政として事故防止対策については、積極的な指導は行って来なかった。

一般に、事故対策は立法/施行、工学/技術、教育/行動変化の3要件を実施することが大切であり、これらが相互に作用しあって効果が上がるとされている。1)

具体的には、子どもを取り巻く環境の整備、子どもへの安全教育、子どもの保護者に対する啓発活動が考えられる。

特に子どもの事故防止においては、保護者への啓発指導が重要であると考えられる。

このため、本県では、平成5年度はモニター地

区(沼津市)を対象とした啓発指導事業(ポスター・パンフレット配布、保健指導等)を重点に実施し、今年度はモニター地区外を対象とした啓発指導事業(チェックリスト配布、啓発ビデオ「アッあぶない」の放映等)を実施している。(表2)

これらの活動に対する保護者の反応や効果について調査を実施したのでその結果を報告する。2)

方法

平成6年10月、静岡市において開催した健やか健康フォーラムに参加した乳幼児(0~9歳以下)を持つ保護者200名を無作為に抽出し、小児の事故対策に対する保護者の考え方についてアンケート調査を行った。

調査の質問事項は表3に示した。

* **静岡県保健衛生部

(Dept. of Public Health, Shizuoka Prefecture)

表1 静岡県の不慮の事故による死亡数

年	年齢階層	0～4歳		5～9歳		計	
		人	% (①/②)	人	% (①/②)	人	% (①/②)
元年	①不慮事故死亡数	33	13.6	8	20.0	41	14.5
	②死亡総数	242		40		282	
3年	①不慮事故死亡数	27	11.2	9	20.5	36	12.6
	②死亡総数	242		44		286	
5年	①不慮事故死亡数	19	9.1	8	26.7	27	11.3
	②死亡総数	209		30		239	

*自動車事故及び自動車事故以外の事故を除く。

表2 静岡県における小児の事故防止対策の実施状況

年 月	実 施 内 容
平成5年4月	母子健康手帳別冊へ小児の事故防止対策を掲載
平成5年4月	「県民だより」7月号による啓発 県民ものしりクイズとして掲載し全戸配布 応募数1,068通、事故防止に対する意見6通
平成5年7月	「保健婦だより」による啓発 県内の保健婦の広報誌に啓発記事を掲載
平成5年7月	啓発冊子「ママこっち向いて!」の配布 100,000部 県保健衛生部(15保健所4支所16,000部)、 74全市町村(84,000部:うち沼津市4,000/清水町700/長泉町700/焼津市2,400)
平成5年8月	啓発ポスターの配布1,000枚 全保健所(18保健所4支所×5枚)、全市町村(74市町村×2枚) 妊婦・乳児健診委託医療機関(672機関×各1枚)
平成5年9月	モニター病院周辺市町村で健診時における「チェックリスト」、啓発冊子を利用した 保健指導を開始(沼津市、清水町、長泉町、焼津市)
平成5年11月	「健康フェスティバル」を利用した広報 川根町で開催された県主催の健康祭りで展示による啓発
平成6年1月	母子保健研修会における講演「小児の事故とその予防」 全県下の保健婦、助産婦、栄養士、養護教諭、看護婦等350名
平成6年8月	「家庭教育すこやか通信」による事故防止啓発 全県下の保育園、幼稚園をとおり家庭に配布(90,000部)
平成6年10月	「すこやか健康フォーラム」を利用した広報 静岡市で開催された県主催の健康祭りで展示による啓発
平成6年10月	事故防止のためのアンケート調査の実施(無作為抽出200名) 事故防止指導に対する保護者の反応及び効果について
平成6年11月	啓発用県広報TV番組「アッあぶない」の企画放映とビデオ収録(15分) 指導を受けたお母さんの意識変化、保健婦、小児科医師の談話による啓発
平成7年2月	「安全チェックリスト」の配布 保健所、全市町村をとおり健診対象保護者に配布(40,000部)

表3 子どもの事故防止のための調査

お子さんの生年月日 平成 年 月 日生 性別 男・女

No	質問事項及び回答欄
Q1	あなたは1～4歳、5～9歳の死亡原因の第一位が「事故」であることを知っていますか。 a)知っている b)知らない c)多いことだけは知っている d)その他()
Q2	あなたのお子さんは、これまでに医者にかかるような事故にありましたか。 a)はい(回) b)いいえ
Q3	Q2で「はい」と答えた方のみ、それはどんな事故でしたか。(複数回答可) a)転落・転倒 b)やけど c)誤飲 d)溺水 e)窒息 f)交通事故 g)その他()
Q4	あなたは、日ごろから子どもの事故防止に注意していますか。 a)はい b)いいえ
Q5	Q4で「はい」と答えた方のみ、どんな点に注意していますか。(複数回答可) a)転落・転倒 b)やけど c)誤飲 d)溺水 e)窒息 f)交通事故 g)その他()
Q6	あなたは、子どもの事故防止ポスター、パンフレットなどを保健所、保健センター、病院などで目にしたり、手にしたことがありますか。 a)はい(何ですか) b)いいえ
Q7	保健所、保健センターで行われる乳幼児健康診査において、保健婦等による事故防止指導が必要であると思いますか。 a)必要である b)必要であるとは思わない c)どちらとも言えない d)その他()

表1 静岡県の不慮の事故による死亡数

結果

1. 小児の死因順位についての認識 (表 4)

事故が小児の死因順位の第一位であることを知っていた保護者は192名中92名(47.9%)で、多いことだけは知っていた者51名(26.6%)を加えると143名(74.5%)の保護者が、小児の死亡原因として事故が多いことを知っていた。また、知らなかった者は49名(25.5%)で、男女の性別による差はほとんどみられなかった。

2. 過去の事故経験 (表5. 6. 7. 8)

医者にかかるような事故を経験している保護者は45名(23.4%)で、うち男児が26名(25.7%)で女児19名(20.9%)と比較し若干多くなっている。

事故経験のある男児の事故回数は1回が最も多く26名中21名(80.7%)で、2～4回の者もわずか見られた。女児の事故回数も1回が最も多く19名中14名(78.9%)で、2回の者が4名(21.1%)であった。

その事故は、転落・転倒が最も多く29名(15.1%)で、男女ともにトップとなっている。次いでやけど、誤飲、交通事故となっており、溺水、窒息事故経験のある者はなかった。

また、日ごろから事故防止に注意している保護者は192名中184名(95.8%)で、注意していない者は8名(4.2%)であった。

日頃から注意している事項の中で最も多かったのは交通事故の151名(78.6%)で、次いでやけどの98名(51.0%)、転落・転倒の92名(47.9%)の順となっており、男女による差はほとんどなかった。

3. 事故防止啓発用資料を目にした経験 (表9)

県が一斉配布した事故防止啓発用のポスター、パンフレット等を保健所、市町村保健センター、

病院等で目にしたり、手にした経験のある者は192名中79名(41.%)で、目にした経験のない者113名(58.9%)の方が多かった。

4. 健診時における事故防止指導の必要性 (表10)

保健所、市町村保健センターで行われている乳児健診、1歳6カ月児健診、3歳児健診など各種健康診査において保健婦等による事故防止指導を行う必要があるとする保護者は192名中167名(87.0%)で、必要とは思わない者は2名(1.0%)、どちらともいえない者23名(12.0%)で、男女による差は少なかった。

考察

行政として事故防止対策事業を実施する場合、最小の予算で効率的かつ効果的な事業展開が要求される。

このため、事故防止対策事業を推進するためには、乳幼児の保護者への啓発指導等がキーポイントであり、それも乳幼児が自分で歩きだし行動が活発となる以前に、事故に対する備えについて、保護者へ啓発指導を徹底させることが最も効果的である。

また、この保護者への啓発指導については、対象となる乳幼児の発達状況や行動範囲をよく把握し、すでに各種の乳幼児健診等の実績がある保健所及び市町村保健センター等の健康診査の機会を活用して行うのが合理的である。

そこで、健診時の事故防止指導を効果的に行う上で、乳幼児を持つ保護者の事故防止についての受け止め方を知ることは大変意義のあることと考え調査を行った。

平成5年の本県の0～9歳児の死亡総数は239名でうち不慮の事故による死亡数は27人(11.3%)

で、例年30～40名の子どもが事故により命をおとしている状況にある。

この、小児の死亡原因として事故死が多いことを認識している者は、昨年度のモニター地区を対象とした調査では86.3%の保護者が理解しており、今回のモニター地区外の調査でも保護者の74.5%が認識していたことから、啓発指導の効果が認められた。

また、医者にかかるような事故経験のある保護者は約4人に1人(23.4%)あり、転落・転倒が最も多く、やけど、誤飲、交通事故の順になっているものの事故回数は男女児ともに1回が最も多く(80.0%)、3～4回かかるケースはすくなくった。

また、大部分の保護者が日ごろから事故防止に注意しており、昨年度のモニター地区においては、96.9%が、又今回の調査では95.8%の保護者が注意しており、有意差はほとんど見られなかった。

注意内容は、事故発生件数の多い事項についてであり、乳幼児期に頻繁に発生する事故内容は集中する傾向にあった。

今後、事故防止対策指導を行う上で、これら事故実態に合った対策を啓発指導することにより、事故発生件数を減少することができるものと考えられる。

平成5年度に、事故防止啓発用リーフレット等を市町村経由で配布しているが、実際に目にしていない保護者が58.9%あることから、啓発用資料の活用方法や指導方法の工夫が必要である。

また、前回のモニター地区調査では、保護者の4分の3(74.5%)が保健所等の事故防止指導を希望しており、今回の調査でも87.0%の者が健康診

査において保健婦等による指導を行う必要があるとしている。

少子化が進む中、出生した子どもを健全に育成することがますます重要になってきている。

今後、行政が効果的な事故防止対策指導を行うためには、事故実態に合わせ、乳児健診(6カ月、10カ月)、1歳6カ月健診、3歳児健診などの機会を活用した保健婦等による発達段階に応じたきめ細かな指導を積極的に実施する必要がある。

このため、健診時に啓発指導として利用のできる啓発用ビデオ、展示用パネル、ポスター、発達段階別事故防止対策マニュアル等の整備を早急に検討することが重要である。

[文献]

- 1)田中哲郎、杉山太幹訳：事故防止対策への課題、日本公衆衛生協会、東京、平成6年
- 2)田中哲郎、田宮文男：静岡県における小児事故対策に対する保護者の反応に関する調査研究、平成5年度厚生省心身障害研究「地域・家庭環境の小児に関する影響などに関する研究」報告書、平成5年

表 4 Q1. あなたは1～4歳、5～9歳の死亡原因の第1位が事故であることを知っていますか。

	合 計	乳幼児 (男)	乳幼児 (女)
a)知っている	92 (47.9%)	51 (50.5%)	41(45.1%)
b)知らない	49 (25.5%)	24 (23.8%)	25(25.7%)
c)多いことだけは知っている	51 (26.6%)	26 (25.7%)	25(25.7%)
d)その他	0	0	0
合計	192(100.0%)	101(100.0%)	91(100.0%)

表 5 Q2. あなたのお子さんは、これまでに医者にかかるような事故にありましたか。

	合 計	乳幼児 (男)	乳幼児 (女)
a)はい	45 (23.4%)	26 (25.7%)	19 (20.9%)
b)いいえ	147 (76.6%)	75 (74.3%)	72 (79.1%)
合計	192(100.0%)	101(100.0%)	91(100.0%)

表 6 Q3. Q2で「はい」と答えた方のみ、それはどんな事故でしたか。(複数回答)

	合 計	乳幼児 (男)	乳幼児 (女)
a)転落・転倒	29 (15.1%)	17 (16.8%)	12(13.2%)
b)やけど	6 (3.1%)	4 (4.0%)	2(2.2%)
c)誤飲	5 (2.6%)	3 (3.0%)	2(2.2%)
d)溺水	0	0	0(
e)窒息	0	0	0
f)交通事故	3 (1.6%)	2 (2.0%)	1(1.1%)
g)その他	7 (3.6%)	4 (4.0%)	3(3.3%)
合計	50 (26.0%)	30 (29.7%)	20(22.0%)

表 7 Q4. あなたは、日ごろから子どもの事故防止に注意していますか。

	合 計	乳幼児 (男)	乳幼児 (女)
a)はい	184 (95.8%)	97 (96.0%)	87 (95.6%)
b)いいえ	8 (4.2%)	4 (4.0%)	4 (4.4%)
合計	192(100.0%)	101(100.0%)	91(100.0%)

表 8 Q5. Q4で「はい」と答えた方のみ、どんな点に注意していますか。(複数回答)

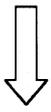
	合 計	乳幼児(男)	乳幼児(女)
a)転落・転倒	92 (47.9%)	47 (46.5%)	45 (49.5%)
b)やけど	98 (51.0%)	48 (47.5%)	50 (54.9%)
c)誤飲	56 (29.2%)	23 (22.8%)	33 (36.3%)
d)溺水	46 (24.0%)	24 (23.8%)	22 (24.2%)
e)窒息	18 (9.4%)	8 (7.9%)	10 (11.0%)
f)交通事故	151 (78.6%)	79 (78.2%)	72 (79.1%)
g)その他	1 (0.5%)	1 (1.0%)	0 (0.0%)
合計	462(240.6%)	230(227.7%)	232(254.9%)

表 9 Q6. あなたは子どもの事故防止ポスター、パンフレットなど保健所、保健センター、病院などで目にしたり、手にしたことがありますか。

	合 計	乳幼児(男)	乳幼児(女)
a)はい	79 (41.1%)	47 (46.5%)	32 (35.2%)
b)いいえ	113 (58.9%)	54 (53.5%)	59 (64.8%)
合計	192(100.0%)	101(100.0%)	91(100.0%)

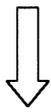
表10 Q7. 保健所、保健センターで行われる乳幼児健康診査において、保健婦等による事故防止指導が必要であると思いますか。

	合 計	乳幼児(男)	乳幼児(女)
a)必要である	167 (87.0%)	86 (85.1%)	81 (89.0%)
b)必要であるとは思わない	2 (1.0%)	1 (1.0%)	1 (1.1%)
c)どちらともいえない	23 (12.0%)	14 (13.9%)	9 (9.9%)
d)その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	191(100.0%)	101(100.0%)	91(100.0%)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:静岡県においては、平成5年9月よりモデル地区を選定し、子どもの事故防止のための啓発・教育活動を各乳幼児健診等の場で行っている。これらの指導方法に対する保護者の反応や効果を把握するため、昨年度はモニター地区において、また今年度は、モニター地区外においてアンケート調査を行った。今回の調査結果によると74.5%の保護者は子どもの死亡原因として事故死が多いことを知っており、また95.8%の者が日ごろから事故防止に注意していた。特に注意している事故防止対策としては交通事故、やけど、転落・転倒、誤飲、溺水、窒息であった。なお、事故防止ポスター、パンフレット等を目にしたことがある者は41.1%で、保健所、保健センターで行われている各種健診時の発達段階別事故防止のための指導を必要とする者は87.0%であった。